第２部

実践編

第５章　自閉症の障害特性に応じた日常生活指導

第６章　自閉症の障害特性に応じた教科学習

第７章　自閉症の障害特性に応じた校外学習等

第８章　自閉症の障害特性に応じた特別活動

第９章　自閉症に配慮した共同及び交流学習

第 10 章　自閉症の障害特性に配慮した保護者支援

第 11 章　中学校への進学に向けて

第５章　自閉症の障害特性に応じた日常生活指導

１　基本的生活習慣の形成のための指導

小学生段階においては、着替えや食事、排せつに関することなど日常生活に必要な自分の身の回りのことが、指示がなくても一人でとりかかることができるかどうかが重要なポイントになります。また、自閉症の児童の場合、学習したことが他の場面で般化しにくいという問題や最初に学習した特定のやり方にこだわってしまい修正が難しいという問題があります。さらに、状況に応じた着替えや身支度、身だしなみ、公共の場での身辺処理の仕方など、実際場面に即した対応の難しさがあります。これらの点に配慮した指導を行いましょう。

また、自閉症の児童の指導において効果的な視覚的手掛かりは、児童の状況に応じて柔軟に変化させることも大切です。指導開始時に効果的であった視覚的手掛かりがずっと必要なわけではありません。支援の程度を実態に応じて変化させることも、児童の主体的な行動につながっていきます。

(1) 着替えの指導のポイント

★着替えの実態を把握しましょう。

言葉かけや援助がなくても、一人で行えるかどうかを見極めましょう。具体的にどこでつまずいているのかをチェックしましょう。

★着替えの場所を明確にし、集中して取り組めるように環境調整をしましょう。

着替えの指導において、つい立てを用いる、テープでラインを引く、床に足型を貼るなどの支援は、着替えの場所を明確にします。必要な情報に絞り、注意を逸らしてしまう可能性のある掲示物などの情報を減らすことは、着替えに集中する環境づくりにつながります。このように、基本的な生活習慣の形成のための指導においても、指導内容に応じた教室環境の整備はとても重要です。

＜指導の例＞

○ステップ１

Ａ君の着替えの現状を把握します。Ａ君の現状は以下の通りでした。

１　上のシャツを脱ぐ。	できる
２　体操着（上）を着る。	前後を間違えることがある。
３　ズボンを脱ぐ。	できる
４　体操着（下）をはく。	前後を間違えることがある。

シャツを着る時、ズボンをはくときに前後の判断が曖昧であることが分かりました。詳しく着替えの様子を観察すると、「前後を確認すること」でつまずいていることが分かりました。

○ステップ２

Ａ君が自分で前後を確認することができるように、指導の工夫をしていきます。例えば、体操着を机上にいつも同じように広げてから、裾を持って頭にかぶることを指導する場合について考えましょう。シャツの広げ方を図で示したり、手で持つところにマークをつけたりします。

◎ポイント

着替えのどこでつまずいているのかを見極め、「反対だよ」と言葉で言われて直すのではなく、自分で視覚的手掛かりを活用して正しく行えるようにすることが大切です。

★視覚的な手掛かりを活用しましょう。

指導の際には、達成させたい課題を明確にして、教師の言葉かけや指差しなどがなくても児童が自分の力で取り組めるようにしましょう。人による直接的な働きかけがなくても、いつも同じ手順で着替えることができるような、環境設定の工夫、視覚的な手掛かりが必要です。

どんな手掛かりがあれば、一連の着替えや荷物の整理が滞りなく児童が一人で行えるのかを見極め、工夫します。そうすることで、指示がなくても一人で行えるようになっていきます。

★家庭と学校で、同じ手順で行うようにしましょう。

自閉症の児童の場合、前述したように般化の難しさがあります。そこで、家庭と連携して、事前に情報収集を十分に行い、学校と家庭で同じような手順で行うようにすると、学校で覚えたことを家庭でも同じように行いやすくなります。

★公共の場など、場面に応じた着替え方を一つ一つ丁寧に教えましょう。

家庭の脱衣場や学校の更衣室、他の人と協同利用する公共施設や娯楽施設の更衣室など、場面ごとに適切にできるように指導します。「Ａの場合にはＡ’のようにして、Ｂの場合にはＢ’のようにする」というような様々な場面を想定した指導が必要になります。

運動や清掃、調理や儀式的行事など、時間・場所・場合に応じた服装の選択についても、実際的な場面を捉えて、指導します。

自閉症の児童には感覚の過敏や偏りがしばしばあります。味覚の過敏や偏りは、食事指導と密接に関連します。ある種の味や食感だけはどうしても受けつけないということもあります。見た目や色などが児童の食物の印象に影響を与えている場合もあることを踏まえておくことも大切です。また、聴覚などの過敏は、食堂や大勢の人でにぎわう空間での食事場面に影響を与えることもあります。場合によっては環境調整が必要なこともありあます。抽象的なものごとの理解に難しさがあるので、食事場面に適切な話題を選択することが難しかったり、口を開けて咀嚼すると相手を不快にさせてしまうことが分からなかったりします。これらの特性に配慮した指導が大切です。

⑵ 食事の指導のポイント

★食事の楽しさを失わないように注意しましょう。

「好きな物をおかわりするために、嫌いなものも少しだけ食べましょう。」というような好みのものを励みに嫌いなものに挑戦することを促す指導もよく行われます。児童の日頃の食事の様子をよく観察し、感覚過敏としての味覚の過敏に配慮して、どうしても受けつけないほど苦手なものを無理強いしたり、条件提示したりすることがないようにしましょう。

「減らしてください。」「半分にしてください。」というコミュニケーションの指導場面としても捉え、食べられそうな量を判断できるように支援していくことが大切です。

★視覚的手掛かりを活用しましょう。

食事のマナーについても視覚的手掛かりを示して指導することで、具体的にどうすればよいのかが児童に伝わりやすくなります。レストランや交流給食などの場面でも、視覚的手掛かりがあれば、１つ１つ言葉で注意をしなくても守るべきルールやマナーが伝わります。

★場面に応じた食事のマナーを教えましょう。

レストランでの食事場面などは、マナーやルールを学習できるように教室でシミュレーション学習をするなど、事前の学習が大切です。

＜指導の例＞

〇ステップ１

Ｂ君は苦手な食べ物の種類も多いので、食事時間は短く、食べられるものがなくなると立ち歩いたり、ふざけたりして注意されることが多くあります。そこで、食事の前に量の調整をし、盛り付けた分だけ食べることができたら、シールを貼るなどして称賛することにしました。食事後の活動（片付けや静かに行える活動など）もあらかじめ約束をして、イラストや文字で示しておくとよいでしょう。

〇ステップ２

Ｂ君は少しずつ食事の間は、座って食べることができるようになってきました。でも、好みの物を一気に食べてしまいます。新たに身に付けてほしいマナーやふるまいがあるときには、イラストや写真で提示し、適切に行えた時にシールや〇を付けていきます。

◎ポイント

褒める機会を設定することで適切な行動を増やしていくことが大切です。

２　朝の会・帰りの会の活動の指導

多くの特別支援学級の朝の会には、挨拶・出欠の確認（呼名、健康観察）・日直の確認・日付や曜日、天気の確認、今日の予定、場合によっては学級独自の話や歌などの小集団活動などの活動が盛り込まれています。児童にとって分かりやすく、参加しやすい朝の会・帰りの会にするためには、得意な力を発揮する活動場面を盛り込んだり、苦手とすることに配慮したりすることが大切です。

(1) 朝の会の指導のポイント

★分かりやすい視覚的スケジュールを提示しましょう。

自閉症の児童は、抽象的概念の理解や操作、先を予測することを苦手としています。その日の主なスケジュールを写真カード・文字カードやミニ黒板を使って分かりやすく提示しましょう。その際、余分な情報はなるべく置かないように注意しましよう。

★スケジュール理解を促すために、必要に応じて個別スケジュールを提示しましょう。

その日の見通しを持てるように朝の会でスケジュールを提示しても、集団での提示では理解できないことも多くあります。一日のスケジュールを提示されても、教師がその場で１つ１つ指示をされなければ、学習に必要な物を持って移動したり、準備したりすることができない場合には、スケジュールを理解できていない可能性があります。個別に用意し、スケジュールの理解を図る必要があります。

★スケジュールの変更がある場合、行事に向けた特別のスケジュールの場合にも、スケジュール変更の理由を分かりやすく伝えましょう。

水泳指導などの時期は、気温や水温を計って天気と関連させて、予定の変更を受け入れやすくしたり、行事の 2 週間前には時間割の変更があるものとして教えたりします。変化に応じられるように、通常と異なるスケジュールであることを予告したり、変更理由を示す視覚的情報を提示したりする工夫が必要です。

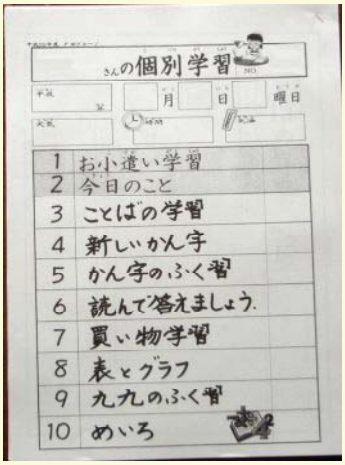
★家庭と連携した指導の工夫をしましょう。

児童がどこまで先の見通しを（1 か月、1 週間、明日など）持つことが可能なのかを見極めた指導をすることはとても重要です。家庭と連携して、家庭でも活用できるスケジュール管理の方法を考えると家庭生活への支援にもつながります。朝の会の情報から、スケジュールを自分でシートに書き込むことは、スケジュール管理につなげるための方法の一つです。

★健康観察の仕方を工夫しましょう。

「健康観察」の際に、自分の体調や気分の状態をうまく伝えることが難しい場合があります。そこで、一問一答式の健康チェック表を用いて、体調をチェックしたり検温の結果を記入したり、表情を示した絵カードを活用して気分を表現したりする方法も効果的です。

＜スケジュールの提示の例＞



◎ポイント

その日のスケジュールを提示し、いつ何をするのか、どこでするのか、どれだけするのかなどを分かりやすく示すことで、見通しを持って落ち着いて学習することができます。1 日の流れ、1 週間の流れ、月の予定など、児童の実態に応じて、指導していくことが大切です。

★集団参加が難しい場合の支援の工夫と配慮をしましょう。

朝の会に参加することが難しい場合、その児童ができそうな活動を役割活動（係活動）として位置付け、部分的に参加を促すことから始めましょう。「〇〇さん、日付とお天気を言ってください。」「〇〇先生のお話です。」のように役割を設定すると、やるべきことが明確になり集団活動に参加しやすくなります。歌、身体表現、集団ゲームなどみんなで行う活動への参加が難しいことがあります。音や身体接触などの問題もあります。その場合には、例えば学級での活動に必要な準備物を用意するという形で参加する、あるいは、活動場所から少し距離をおいて参加するなど、児童の目標を個別に段階的に設定することも大切です。

★褒める場面を工夫しましょう。

朝の会でその日のめあてを提示したら、帰りの会でその日の評価をしましょう。「今日のめあて」「今週のめあて」を確認したり自己評価をしたりする場合には、「めあて」を数値化したり、シールを貼るなど評価シートを工夫したりすることで、児童が「めあて」の内容をより意識できるようになります。自閉症の児童には、決められたことは几帳面に手順通り行動し確実に行うよさがあります。褒める機会を設定して、学級で認め合う雰囲気作りをしていきましょう。

3　休み時間の過ごし方

自閉症の児童は、何かしなければいけないことがあって、目的を持って過ごす時間はいいのですが、何をすべきかが明確ではない時間は混乱してしまうことがあります。「自由にしていいです。」と指示をしても、自由時間を過ごす活動のレパートリーが乏しい場合には、具体的に何をしてよいのかが分からず、行動上の問題が生じることもあります。「自由時間を楽しむ」ことが苦手なのです。

本人の好みやできる活動を考慮して、楽しみながら適切に過ごせるように意図的に指導していくことが必要です。また、自閉症の児童は、余暇活動のレパートリーが少ない傾向があります。将来、充実した生活を送ることを踏まえ、中学校以降に更に余暇活動を広げることができるよう、小学校段階では興味・関心に応じた内容で、周りからの働きかけが少なくても進めることができる活動のバリエーションを増やしていくことが大切です。

＜指導の例＞

○ステップ1

休み時間に高学年のC君は、教師や友達に誘われると一緒に遊ぶこともありますが、特にやりたいことが見付からない様子が見られます。家庭でもテレビやゲーム以外に興味を持っていることがないようです。

このように、余暇活動のレパートリーが少ない児童には、まずは「一人でできること」を探します。絵を描くこと、パズルをすること、音楽を聴いたりすること、好きな電車の本を見ることも余暇になります。児童の実態に応じて一人で過ごすことができる活動として何があるのか、家庭と情報交換しながら考えてみましょう。

○ステップ2

一人でできる活動が増えてきたら、日常生活の中で余暇活動を選択する機会を増やしていくことが大切です。活動時間や場所、選択できる条件についても視覚的に分かりやすくする配慮が必要です。

◎ポイント

実際の児童の休み時間の過ごし方の実態を把握してから指導をしましょう。児童の興味・関心に応じて一人でできる活動を増やしたり、教師が部分的に支援をして友達と一緒にできる活動を増やしたりしましょう。

児童が楽しんでいる活動をより周囲に認められる形にしていくことも大切です。音楽を聴く場合に周囲に許容される音量にしたり、ヘッドホンを活用したりすること、準備や後片付けも自分でできることなどについても教えましょう。

4　清掃活動や係活動

自閉症の児童にとって、達成感や満足感を得ることが励みとなり、さらに自分の持っている力を発揮しようという意欲を育てることはとても重要です。努力の結果として家族や周囲から褒められたり認められたりすることが本人の喜びになるように導きます。家事やお手伝いなどの活動は、将来の自立や就労の練習の機会にもなります。

学習したことを他の場所で同じように行うことが苦手ですので、学校で指導した清掃活動や

係活動に関連した内容を家庭でも生かせるようにする工夫が必要です。

(1)　清掃活動や係活動の指導のポイント

★視覚的な手掛かりを示し、何をするのか明確にしましょう。

学級での係活動や役割分担は、「いつ・どこで・何をするのか」を明確に提示しておきます。視覚的手掛かりを活用することで理解しやすくなります。係活動の仕事内容もどのような手順で行うのか具体的に分かるように提示しておくと、取り組みやすくなります。

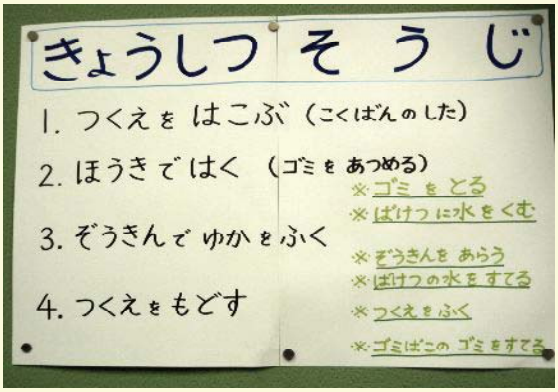
★分かりやすい評価をしましょう。

「おそうじ点検カード」や「係活動チェックシート」など、自分の分担の清掃や係の仕事がきちんとできたかどうかを具体的にチェックする評価カードを活用しましょう。取り組み内容の改善や意欲の向上につながります。

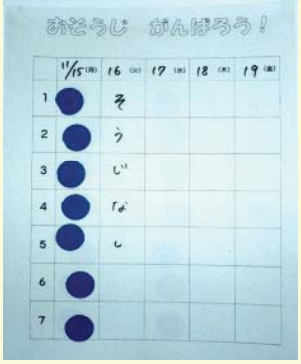
★家庭と連携して指導をしましょう。

年齢段階や家庭の希望を踏まえて、家庭の取り組みにつながる指導をしていきましょう。小・中学校段階の家事のスキルとしては、新聞など物を所定の場所に運ぶこと、留守番をすること、テーブル拭き、配膳の手伝い、洗濯物をたたんでしまうこと、ごみ捨て、食器洗ったり拭いたりすること、簡単な買い物をすること、ほうきや掃除機を使った掃除、持ち物の整理などが挙げられます。学校で覚えた手順書を使ったり、視覚的手掛かりを使ったりして、家庭でも掃除や家事のお手伝いができるような指導をすると家庭の取り組みにつながりやすくなります。

掃除の指導のための教材の例１



教材の例２



○ステップ１

高学年のＤさんは、掃除手順カードに従って掃除をすることができています。高学年になって掃除機のかけ方も学習しました。掃除機の準備（用具入れから出してコンセントにつなぐ等）や掃除機を動かす方向などの操作の仕方や片付けもできるようになってきました。写真カードを使った手順書を見て、決められたマットの上を隅々まで掃除機をかけることができるようになりました。

○ステップ２

Ｄさんの家庭からの希望もあり、家でもお手伝いの１つとして、掃除機で決められた部屋のじゅうたんをきれいにすることを目標にした指導を始めました。家で使う掃除機の手順書や掃除機を動かす方向を示す写真カードなどは家庭の協力を得て作成しました。

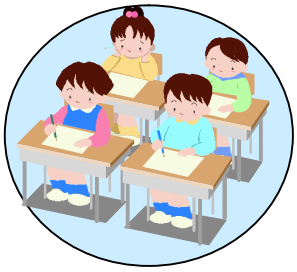
◎ポイント

手順表や視覚的手掛かりを活用することで、学校と同じようなやり方で掃除をすることができるようになります。場合によっては、家庭用の手順書や視覚的手掛かりを家庭の協力を得て作成することが必要な場合もあります。

第６章　自閉症の障害特性に応じた教科指導

１　教科指導に共通した配慮事項

学習の指導に当たっては、自閉症の障害特性を理解して進めましょう。



★声かけは明瞭簡潔にしましょう。

自閉症の児童にたくさんの情報を示したり、次々と言葉かけをしたりするようなことは避け、短く分かりやすい言葉をかけ、確実に伝わるようにしていくとよいでしょう。

★具体的な指示を出しましょう。

言葉の理解が困難なために、曖昧な言葉や抽象的な言葉「しっかり」「ちょっと」「ちゃんと」・・・などの多くは正しく伝わらないことがあります。教師が何を求めているのか、どうして欲しいのか、具体的に伝えることが大切です。例えば、「ちょっと待って」を「あと１分待って」と具体的な言葉に替えるとよいでしょう。

★同時に複数のことを行うより、一つずつ処理していくほうが得意です。

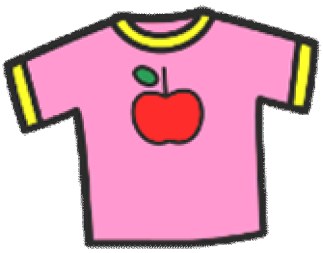
２つ以上のことを同時に指示されると処理ができないことがあります。例えば、「筆箱を出して、鉛筆と消しゴムを用意しましょう。」と指示を出すより、「筆箱を出しましょう。」「鉛筆を出しましょう。」･･･と言うように、一つのことを終えてから次の指示を出すと効果的です。

★言葉の背景にある目に見えないことをイメージするのが困難です。

想像や空想が苦手なために、国語の学習で言えば心情理解や感想を述べることが困難な場合が多いです。動作化やロールプレイングなどを取り入れていくと効果的です。

★視覚優位を生かしましょう。

自閉症の児童の多くは、言葉を聞いて考える力より、目で見て考える力のほうが強いと言われています。言葉や時間など目に見えないものは理解しにくい反面、視覚的な課題にはよく取り組めます。絵カードや写真を用いて、視覚優位を活用して学習を進めると効果的です。



しかし気を付けなくてはいけないことは、絵カードや写真を利用しても、注目の部分が個々に違うために、時には教師が意図した通りに通じないこともあります。例えば、右の絵カードを用いて、教師は「これは何ですか」と問い、「シャツ」という言葉を期待しても、児童によっては「りんご」と答えることがあるということです。

★機械的な記憶力が優位ですが・・

文字の読み書きの定着が早く、計算方法を覚えると短期間で計算ができるようになる児童がとても多いです。しかし、文字が書けるから、計算ができるからと言って、必ずしも意味や内

容を正しく理解しているとは限りません。

★<u>褒めて育てましょう。</u>

正しく活動が行えたら、その都度にたくさん褒めましょう。褒めて育てることは教育の基本です。なお、くどくどした注意等は自閉症の児童にとって混乱するばかりで、逆効果になるので控えましょう。

★<u>保護者のニーズを理解しましょう。</u>

個別指導計画は必ず保護者とじっくり話し合いをもち、保護者のニーズを理解して作成していきましょう。保護者の期待やニーズを理解した上で、個別指導計画に基づいた指導を進めていくと効果的な指導につながり、保護者との信頼関係も深まります。

２　国語

(1)　指導形態の工夫

ア　個別学習

個別学習とは１対１の学習形態を指しているわけではありません。個別の課題学習と捉えてください。一人の教師が児童を３人担当するとしたら、３人分の個に応じた教材を用意することです。教材は、児童の実態を適確に把握し、事前に準備しましょう。

特別支援学級は、特別支援学校に比べ教員数が少ないので、１対複数の形での指導が基本になります。

指導に当たっては、できるだけ声かけを少なくし、明瞭で簡潔に話をします。丁寧に指導しようとしてたくさん話しかけるのは、混乱を招くことになりますので、気を付けたいものです。

教師は、中央に座り、複数の児童の個別課題を指導します。

自閉症の児童に対しての指導では、できるだけ個別学習の場を設定し、学習に参加できる環境や持っている力を十分に発揮できるような環境作りに心がけましょう。個別学習により、達成感・満足感を味わうことができます。

イ　グループ学習

グループ学習を進めていくと、コミュニケーションがとれる児童と教師とのやり取りが多くなり、ややもすればコミュニケーションを苦手とする自閉症の児童が、学習に参加しにくいことがあります。

意見や感想を発表する時は、間違った意見や答えにならないように、また、みんなの前で失敗させないように、事前に本人と相談し発表させます。相談はできても表現が苦手な児童に対しては、本人の言葉を生かしながら教師が紙に記入し、それを読ませるようにします。相談ができない（コミュニケーションがとれない）場合は、教師の言葉でいいので、紙に書いて本人に読ませるようにします。（耳元でささやくのもいいのですが、教師の言葉が十分に理解できず、違った言い方をすることがあります。文字が読める時は、できるだけ書いたものを読ませたほうが、間違いが減ります。）どんな形であれ、発表した後は必ず教師が褒める

ようにし、自信につなげていきましょう。

⑵　コミュニケーション

自閉症の児童にとって、コミュニケーション能力の向上は重要な課題です。国語の授業だけでなく、教育活動全般を通し指導するように心がけます。その際、主語・述語をはっきり言わせます。助詞が曖昧になることがあるので、その時は必ず訂正しましょう。

国語で取り組む場合、できるだけ簡単な話型を習得できるようにしましょう。例えば、自己紹介の練習ではあらかじめ紙や小黒板に話型を書き入れておき、それを見ながら練習し、自分で発表できるようにします。

何回も繰り返し練習することで、みんなの前で自己紹介ができるようになります。

自己紹介の話型の例

① ほくの名まえは〇〇〇〇です。
② △△△小学校の□年生です。
③ ぼくのすきなたべものは
▽▽▽です。
④ 大きくなったら
××になりたいです。
⑤ よろしくお願いします。

日頃から気を付けなくてはいけないことは、発表する機会を多く設定すること、また、間違った表現をしても周囲が笑わないような環境を作ることです。

話をする時は、自分の顔を相手の顔に向けるということが苦手な児童が多いですが、根気よく指導していきましょう。「目を見て！」と声をかけるより、相手の顔に自分の顔を向けることを意識させていきます。

⑶　文字の読み書き

文字の読み書きができるようになると、身の回りにある文字に対する興味・関心が広がり、世界がぐんぐん広がっていきます。文字の習得により外へ目を向けるようになり、たくさんの情報を得ることができます。そのためにも、文字の読み書きができるように早めに取り組んでいきましょう。

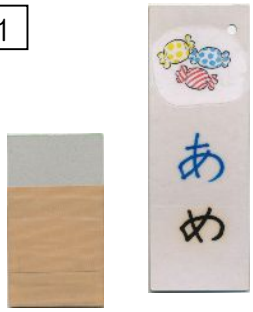
文字は読めなければ書けません。読む指導と書く指導を同時に進めるのもいいのですが、読む指導を先に進めておくと、他の学習に参加したときにも、板書やプリントに読める文字（知っている文字）があることで、学習への参加の機会が増えます。

視覚優位の特性を生かし、絵カードと文字カードを使い学習を進めます。並行して、日常的に身の回りにあるものの名称を確認し、名称を定着させる機会を授業以外のところでも確保するとよいでしょう。

いろいろな指導法がありますが、その一例を紹介します。

50 音字順にこだわらず、文字の少ない「て（手）」「は（歯）」のようなものから、学習させる方法もあります。

1



①絵と文字を書いたカードを用意します。（50 音字分）

②①のカードの文字の部分が見えなくなるような長さの（①の つ分あると便利です。）

2

①を②に入れ文字を隠し、絵だけを見せて、名称を言わせます。分からないときは、解説せずに速やかに名称を教えます。

3

何回か名称を言わせたら、文字を見せるようにします。指で一文字ずつ押さえながら、声を出して文字の読みを確認していきます。

4

他のカードも 2 3 と同じやり方で進めていきます。ただし、１時間でたくさんの文字を学習させる必要はありません。児童の実態にもよりますが、１～５字程度でいいでしょう。

次に、２枚のカードを並べます。

「あめ」と書かれた文字カードを渡し、マッチングさせます。

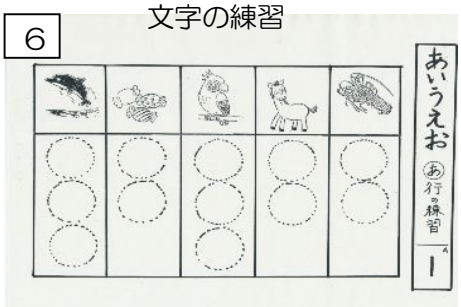
5

絵カードの文字を出して、正解かどうか確認します。

正解であれば、しっかり声を出させて、読みの練習をさせましょう。

6

文字の練習



読みが定着したら文字を書く練習に入ります。 6の文字の練習は、絵カードで使った同じ絵を使っています。なぞりから入っても視写から入っても、どちらでも結構ですので、実態に合わせて進めましょう。

児童の中には、就学以前に文字を覚え独特な書き方をする場合もあります。

修正できれば正しい書き順や書き方などを指導しますが、効果が現れない場合は、無理にその指導に固執しないほうがよいでしょう。

⑷ 読み聞かせ

読み聞かせが苦手な児童には、次のような配慮をすると学習に参加できます。

読み聞かせや紙芝居を見せるときは、場面が児童の席からはっきり見えるか、始めに確認が必要です。自閉症の児童の座席の位置は、一番前の中央が理想的ですが、それが無理な場合はなるべく読み手の近くにしましょう。注視が苦手な児童もいるので、声の出し方だけに気を付けるのではなく、単調にならないように、本や紙芝居を動かして児童の前に持っていくなどの動きをつけるとよいでしょう。

読み手の移動

題材は、言語理解の苦手な児童のために、あまり長くなくて難しい言葉が少ない内容のものを選びましょう。

理解しにくい言葉が出た時は、そのまま読むのではなく、児童の実態に合わせ教師が言葉を言い換えたり、分かりやすく表現したりすることも必要です。また、絵がハッキリしたものを選ぶと、注視しやすくなります。

いろいろな話を聞かせるのではなく、一つの話を繰り返し聞かせるようにしてください。何度も聞いていると、いつのまにか台詞などを覚えることがあります。話の内容が分かってくると注視もできるようになり、時折、笑みが浮かぶこともあります。

⑸ 教材の工夫

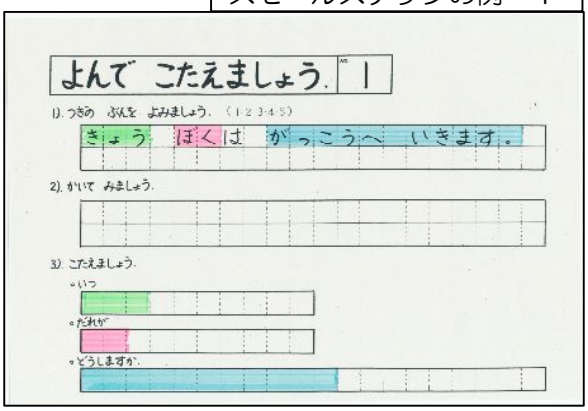
○ 平仮名・片仮名の練習をする場合、絵カードを見ても名称が分からないことがあります。教師が、たくさんヒントを与えて答えを引き出させようと頑張っても、それは児童の混乱を招く原因となりますので、少し待っても答えが返ってこない場合は、解説をつけずに答えを教えていきましょう。

○ 自閉症の児童の中には、読解問題を苦手とする児童が多く見られます。読解問題はスモールステップ方式で指導していきます。

国語の教材は本来縦書きですが、手や腕で文字が隠れて見えなくなったりすることがないように、右の教材（スモールステップの例１）はあえて横書きにしています。こうすることで、文字が見えやすくなります。

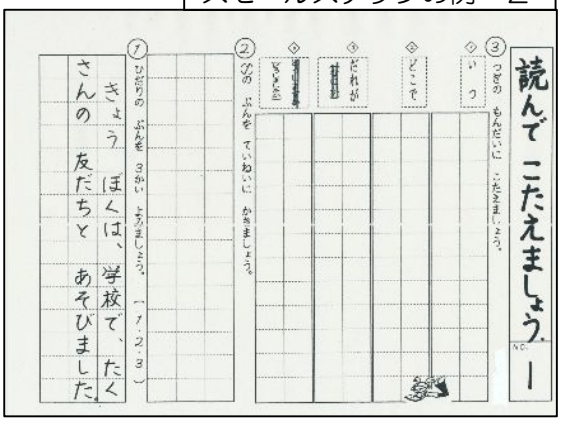
始めに、カラーマーカーなどを用い視覚情報によるヒントを与えます。一つのプリントを４～５回繰り返してから、次のプリントに移りますが、このシリーズの問題を何枚か用意します。途中からカラーマーカーのヒントをなくします。

スモールステップの例 1



※この教材では「いつ・だれが・どうする」をおさえます。

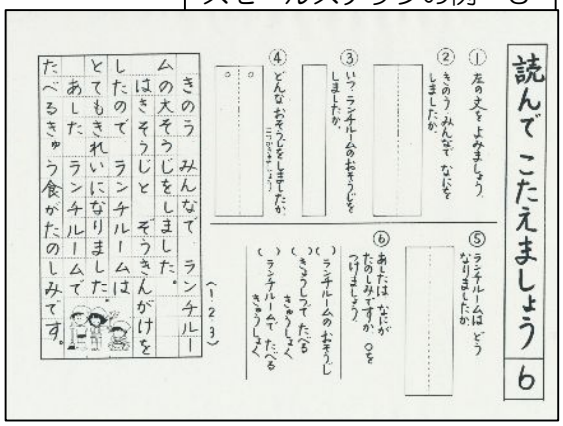
スモールステップの例　２



前半の教材はこの形でよいのですが、後半は、主語と時の位置を逆にして、「いつ・だれが・どうする（どうした）」をしっかり理解できるようにしていきます。かなりの日数が必要とされますが、継続は力なりです。

例２のでは、“どこで” を入れています。だんだんと長文にしていきます。

スモールステップの例　３

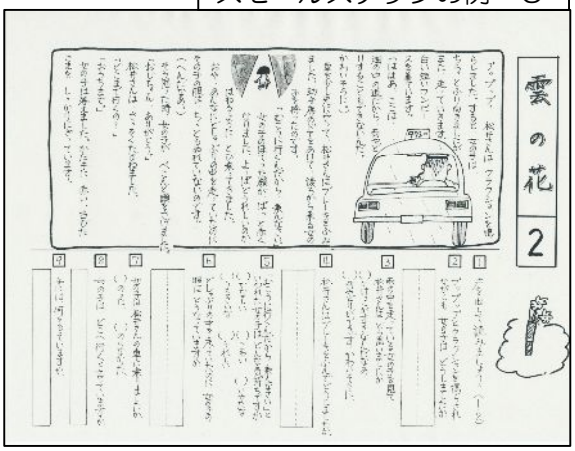


★　心情を問う問題はなかなか理解しにくいので、２～３個くらいの選択肢を設け、そこから選ぶようにするとよいでしょう。教師が動作化してヒントを与えると効果的です。

★　日記を書くことを家庭学習として、必ず、気持ちを書き入れるように保護者に協力を求めるのもよいでしょう。

スモールステップの例　４

スモールステップの例　５



少しずつ文が長くなり、質問の数も増えます。徐々に心情を問う問題も入ってきます。

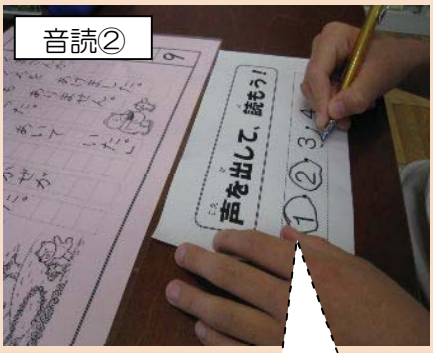
⑹　自習教材

一般的に、学習意欲を高めるためには問題数を減らすなどの工夫が有効とされていますが、自閉症の児童は学習の進め方が分かると、問題数を減らさなくても根気よく問題に取り組むことができます。

その特性を生かし、自習教材として漢字の練習や、音読・視写などが有効です。

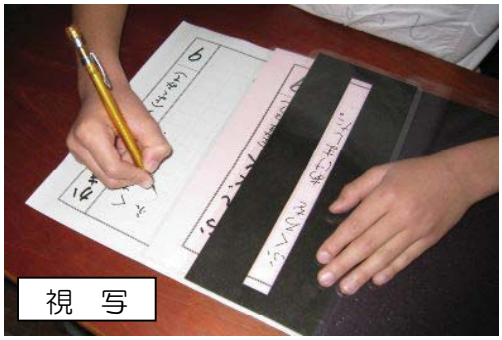
漢字の練習

音読①


音読②

※音読の課題を出す時は、右記の表のように、何回読むのかはっきり表示し、その数字を書きます。

読み終えるごとに児童に〇を付けさせます。（音読②）この表があることによって見通しが持て、約束の回数分、読み通すことができます。


視　写

３　算数

算数の授業に当たっては、数字の読み書きや数量の概念の指導をします。具体物を使い、指で対応させながら数える、具体物を数えて数字カードを取る、指示された数字のカードを取る、数字カードを見て書かれた数字を読む、指示された数の分だけ具体物を取るなどの活動を通しながら、指導していきます。

⑴　指導形態の工夫

指導形態については国語の指導と同じです。グループ学習ではなかなか学習に参加しにくいのが自閉症の児童です。そのことを踏まえて個別の目標をしっかり立て参加の工夫をしましょう。

児童の持っている力を最大限に伸ばすためにも、個別学習の時間をできるだけ設定するようにしましょう。

⑵　足し算・引き算

多い・少ないことの意味が理解できないために、引き算の指導は難しいとされ、引き算の指導を課題としていなかった自閉症の児童の話を耳にしたことがあります。計算ができても応用ができない、生活に生かされないならそんなに力を入れて指導する必要はないと思われがちですが、そうではありません。今、生かされなくても、計算方法を定着させておくと、成長するともに徐々に生活の中で生かされる日があるので、継続して指導に当たることが大切です。

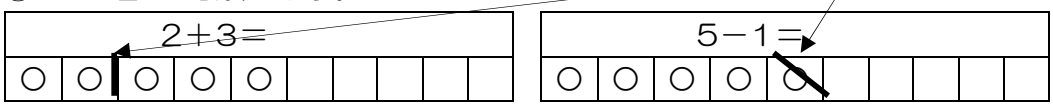
ア　繰り上がり・繰り下がりのない計算

始めに、足し算・引き算の意味を具体物で理解させ、そして計算に入ります。

例)「２＋３＝」「５－１」 の指導を考えましょう。いろいろな指導法がありますが、下記はその一例です。

①　具体物を使って計算します。　　※鉛筆で線を引かせる。

②　○を書いて計算します。



③　○なしでできるようになったら、筆算の形を練習します。

	２
＋	３

	５
－	１

※　筆算の計算では必ず枠を書き、位がそろえられるようにしてあげます。

④　応用として、繰り上がりや繰り下がりのない２桁・３桁の計算へと進みます。筆算の計算の仕方を学習していきます。

	２	１
＋	３	２

	６	５
－	２	１

	１	２	３
＋	２	４	２

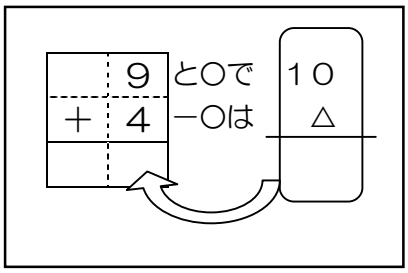
	７	５	８
－	５	１	６

イ　繰り上がり・繰り下がりのある計算

①　あらかじめ１０の分解を学習しておきます。

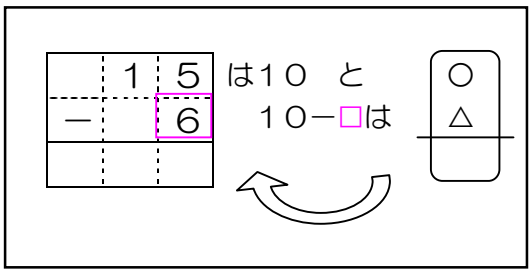
②　ブロックやおはじきを使い、式の意味を理解させます。

＜繰り上がりのある足し算の指導例＞



①９といくつで１０ですか。（○に１を書かせる）
②４から１を取ったので　（○に１を書かせる）
　４－１はいくつですか。（△に３を書かせる）
③１０＋３はいくつですか。
　（右端に１３を書かせ、
　　筆算の答えの欄にも１３を書かせる。）

＜繰り下がりのある足し算の指導例＞



①１５は１０といくつですか。
　　（○に５を書かせる）
②１０から６を引くと
　　（□に６を書かせる）
　いくつですか。
　　（△に４を書かせる）
③５＋４はいくつですか。
（右端に９を書かせ、筆算の答えの
　　欄にも９を書かせる。）

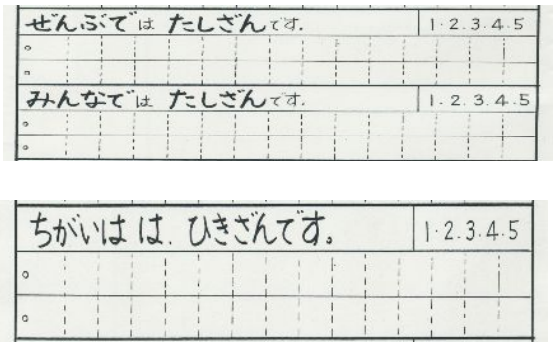
パターンを覚えると、自閉症の児童は自分で計算をすることができるようになります。始めのうちは、補助の欄を付け、確実にできるように繰り返し指導します。繰り返すうちに補助の欄がなくてもできるようになっていきますが、一度になくすのではなく、右端の計算は答えを書くのを省かせるなど、少しずつ変化をつけていくようにします。

あくまでもスモールステップ方式で指導をしていきます。

ウ　文章題

文章題では、キーワードの学習をしておくと、足し算の問題か引き算の問題かの区別がつきやすくなります。

おはじき等を使い、キーワード「あわせて」等の意味を理解させます。じっくり考えさせることも大事ですが、言葉に頼って混乱させないように、指導の際は注意していきましょう。

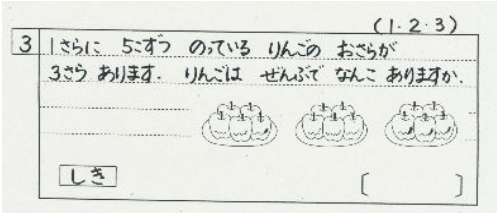


「あわせては足し算ですか？引き算ですか？どっち？足し算？引き算？」という進め方より、動作を見せながら「あわせては足し算です。」と教えると効果的です。

例えば、左のようなプリントを作り、言葉の理解を図るとよいでしょう。

▲足し算（あわせて・ぜんぶで・みんなで・もらう・買う・乗る・・・など）

▲引き算（残りは・違いは・降りる・食べる・捨てる・帰る・・・など）



なお、文章題には、絵を付けるとそれがヒントとなって、一層理解が進みます。

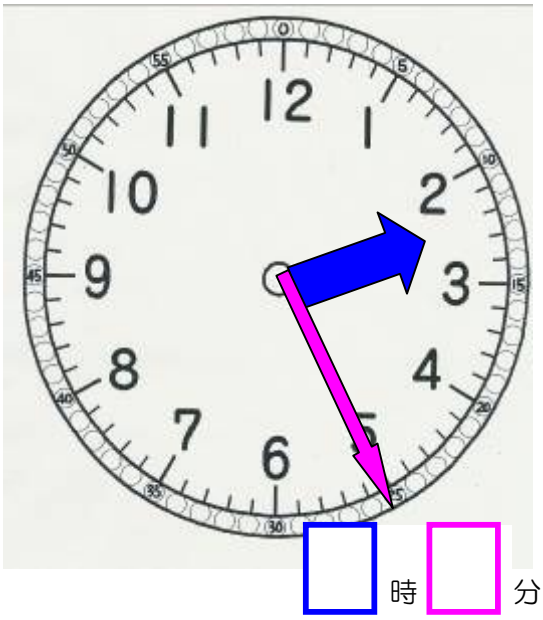
掛け算や割り算の文章題も同様にキーワードの指導をし、教材には絵を入れるようにします。

⑶　日常生活で活用できる内容

時計が読めたり、お金が数えられたりすることは、日常生活の中でとても大切なことです。生活の範囲が広がりますので、ぜひ低学年のうちから指導をしていきましょう

ア　時計を読む（時間が分かる）

時計の指導をするに当たっては、少なくとも６０までの数字の読み書きができるとよいでしょう。



①　短い針のみで時間を読む学習をします。（確実に読めるようになったら）

②　長い針のみで分を読む練習をします。５・１０・１５と数える練習か、または九九の５の段を唱えられるようにしておくと、長針が読みやすくなります。

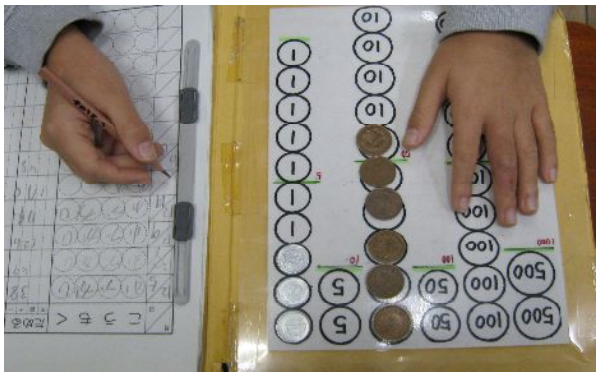
③　短針と長針で時間を読みます。この時、鉢の違いが分かるように、大きさや長さを極端に変えるようにします。

始めのうちは、短針と時間を書く枠の色を同じにします。もちろん、長針と分を書く枠の色も同じにします。言葉で説明するより、カラーマーカーを使ったほうが、理解が早く進みます。

正しく書けるようになったら、２色の色を少しずつ近付けて読む練習をします、最終的には色を使わずに読めるようにしていきます。

イ　お金を数える。

お金は、模型のものを使うより実物を使うほうが効果的です。



始めは、児童は毎日１０円だけを持参し、記録をつけて貯めていきます。１０円玉が５個・１０個になったら、その都度５０円・１００円と両替をしていきます。様子を見ながら、持参するお金の金額を２０円、３０円と変えていきます。

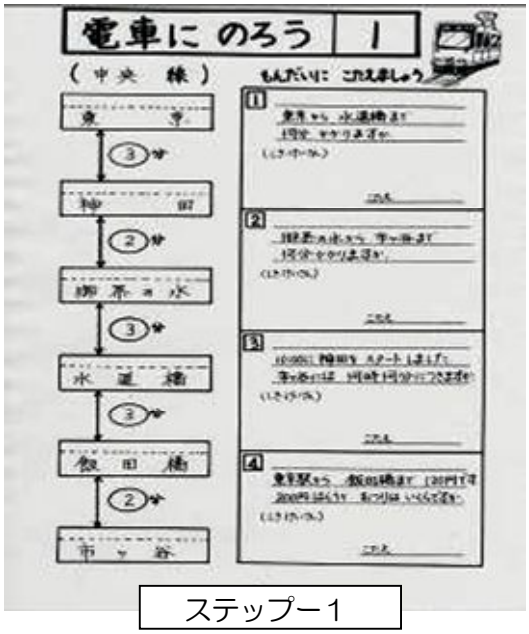
実態に応じて金種を変えるのもよいでしょうが、家庭との連絡を密にしながら進めていきましょう。貯めたお金は、教師が管理しておきます。

貯めるだけでは学習になりませんので、使う活動も取り入れていきます。調理代を徴集するとか、買い物学習に行くとか、生活単元学習と関連付けて指導していくとさらに効果的です。

⑷　教材の工夫（興味・関心を生かした教材）

自閉症の児童の中には、興味のあるものを学習に使うと効果的な場合があります。例えば、電車を使った教材を準備すると、カットの電車の絵を見ただけで、とても生き生きしています。

いろいろな形の教材が考えられますので、興味・関心に応じた教材を作成してみましょう。



ステップー１

ステップー２

ステップー１では、意図的に駅と駅の間の時間を１桁台にしています。ステップー２では２桁台にしています。以下が出題内容の一例です。

◆　○○駅から△△駅まで何分かかりますか。

◆　▽▽駅を１０時に出発すると、□□駅に何時何分に着きますか。

◆　××駅から◇◇駅まで［　　］円かかりました。［　　］円払うとおつりはいくらですか。

◆　駅名に読み仮名を書きましょう。
（これは国語とも関連があります）

※　児童から、「次は○○線にして！」とリクエストがきますのでそれに応じて教材を準備すると、次の時間に大喜びで取り組む児童の姿が見られます。

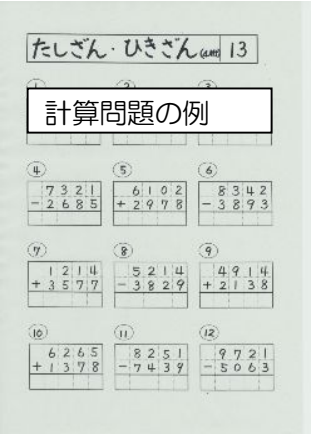
算数で扱う教材はたくさんありますが、自閉症の児童の多くは、概念を習得することに困難があります。

発達段階に応じた授業のねらいや指導内容を設定し、できるだけ言葉に頼らない指導で授業を進めてください。

授業は、テンポよくリズミカルに速やかに進めてください。授業の始めと終わりの挨拶をしっかりさせ、気持ちの切り替えを図りましょう。

⑸　自習教材

国語と同様に、計算問題など問題数が多くても最後まで取り組もうとしますので、計算問題などのプリント教材を用意するとよいでしょう。



自習学習としては、文章題より計算問題のほうが取り組みやすいでしょう。

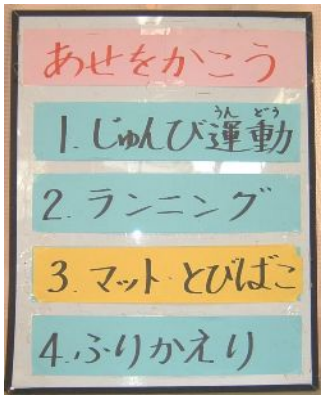
―お金の学習①―
金種ごとにお金を弁別させる学習です。最後に何個あったか数えさせることも学習になります。

―お金の学習②―
表示された金額をそろえます。写真のようにお皿に準備させたり、ビニール袋に入れさせたりと、いろいろなやり方があります。

４　体育

⑴　授業を始める前に、

ア　自閉症の児童は、コミュニケーションが苦手なために、自分の健康状態をうまく伝えられない児童が多くいます。そのため、授業の前に必ず体調の確認や、連絡帳に健康状態について記されていないか確認をしましょう。



イ　衣類の着脱の順番、そのたたみ方の順番などの基礎を、始めのうちにしっかり定着させておくようにしましょう。一度覚えると、一人で確実にできるようになります。

ウ　多動傾向があり着替えの時に移動してしまう場合は、着替えの場所をフラフープなどを床に置いて示すと効果的です。所定の場所で着替えることができます。

エ　首にかける紅白帽のゴムの感触が嫌で、帽子をかぶりたがらない、あるいはゴムをあごにかけられないといったことも起きる場合もあります。決してわがままからくるものではないことを理解しましょう。

オ　視覚優位な児童が多いので、授業の流れを書いた小黒板や時計等の準備をし、安心して参加できるように見通しを持たせるようにしましょう。時計は持ち運びのできる物を選び、校庭や体育館に持っていきます。さらに、終了時間を示すためのシールを用意しておくと便利です。

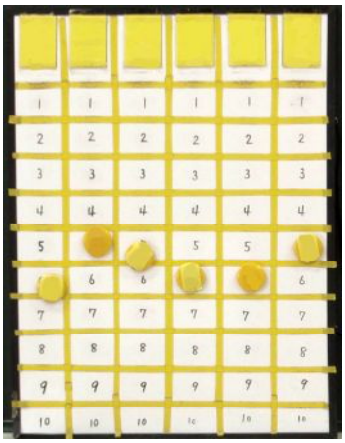
⑵　準備運動

自閉症の児童は、一斉の授業の中で模範体操をしている教師を模倣するのは苦手です。教師は、見やすい位置に立つ、目立つ色のシャツを着る、毎回できるだけ同じ内容の動きにする等の工夫をするとよいでしょう。あるいは、個別に、児童の目の前に別の教師がついて、お手本を見せるのもよいでしょう。

教師がカラーの手袋をすると、注目しやすくなります。左右の色を変えると、右と左の違いがハッキリします（このカラー手袋は、ダンスなどの指導の時に大変役に立ちます）。なお、カラー手袋と教師のシャツの色が、同系色にならないように注意しましょう。

⑶　ランニング

低学年のうちから走る経験を積み重ねておくと、自閉症の児童の中には、走ることが好きになる児童が多くいます。そのことで、地域のマラソン大会に参加するなどの、余暇活動の幅が広がります。



ランニングをする時は、見通しを持たせるために、時計を準備することが大切です。終了時間にシールを貼ることで、児童は最後まで頑張って走ることができます。

体育館で走る場合は、意欲を高めるために流行の曲をＢＧＭとして流すとよいでしょう。ただ、大きな音に過敏であったり

特定の曲に反応したりする児童がいる場合は、音量や選曲に留意しましょう。

校庭を走る時は、時計の他に、あと何周走れば終わるかということが分かる、ボード（前ページ参照）を置いておくと、さらに見通しが持てます。

走っている時に、「がんばれ！」と声援を送るよりも、教師が一緒に走ると、安心して走ることができます。教師もできるだけ児童に寄り添って走りましょう。

⑷　ボール運動

休み時間などを使って、ボールに慣れ親しむ時間を作っておくことも、ボール運動の上達につながります。

自閉症の児童の中には、経験不足からかボールに対する恐怖心を抱いている場合もあるので、当たっても痛くないソフトボールを用いるとか、扱いやすい大きさを考慮して選ぶとよいでしょう。また、ボールの色にも留意します。注視できるように、目立つ色を選びましょう。

色を利用したベース

キックベースなどは、すぐにゲームに進むのではなく、ボールを蹴る練習をしっかりさせます。次に、「蹴ったら一塁に走る」という単純な動きを、何度も何度も繰り返し指導していきます。この動きは、時間をかけて丁寧に指導します。一塁・二塁が理解できないことが多いので、ベースの代わりにフラフープとコーンを置き、「みどり色に行きなさい」、「黄色に行きなさい」と指示を出したほうが、的確に移動ができます。

ドッジボールなどのコートは、ラインを引くだけでなくコーンや平均台を使って立体的に示すと、活動場所がはっきりして動きやすくなります。

立体的なコートライン

⑸　ゲーム

自閉症の児童は、ゲームのルールを理解できずに、ゲームに参加できないことがよくあります。その場合、学級の実態に応じた簡単なルールを作ります。

ゲームをする際は、必ずゼッケンを着用させてグループがはっきり見分けられるようにします。ただし、自分の着ているゼッケンの色に着目できずにいる児童もいます。そういう場合は、腕に同じ色のテープを巻いて、グループの色を理解させるようにします。

ゼッケンの着用

グループ分けは、学年で分けるのではなく運動面での能力を考慮して分け、指導内容もグループの実態に即したものとし、ほぼ全員が参加できるようにします。待ち時間が長くて、活動量が少なくなることがないようにしましょう。

（6）　水泳

水遊びが好きな児童はいいのですが、顔が濡れるのを嫌がる児童は水泳指導を始める早い時期から、水で顔を洗う練習をしておくとよいでしょう。水を張った洗面器等に顔をつけることができるようになると、水への恐怖心が少なくなります。

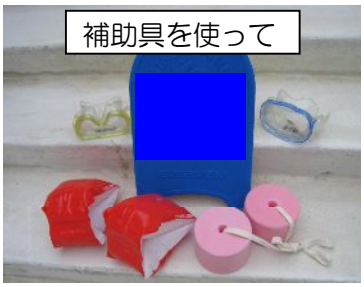
水への恐怖心を払拭するために、ゴーグルの使用や鼻をつまんでもぐることを認めることも検討します。水が顔にかかっても平気でいられる、また、もぐれたという体験を味わわせるこ

とも必要です。同様に、ヘルパー、アーム、救命衣など、いろいろな補助具を使い、水に浮く体験をさせることも必要です。

水泳指導では、「水泳が楽しい」「プールはおもしろい」と感じさせることが先決です。いろいろな活動を取り入れながら、その感じを味わわせましょう。

楽しい体験の次は泳力をつけることを目標とします。自閉症の児童は脱力をすることがなかなか苦手です。伏し浮きの指導が困難な場合は、いつまでもその指導を続けず次に進んでいきます。上記したヘルパーなどの補助具を付け、バタ足の練習や息継ぎの練習を繰り返します。上達が見られたら、補助具の数を徐々に減らしていきます。

クロールの手の動きの指導は、自由形で２５m泳げるようになってから進めると効果的な場合があります。同時に指導するとせっかくできていたバタ足が乱れ、沈んでしまうからです。


補助具を使って

フォームにとらわれない

（7） なわ跳び

なわ跳びはリズム感を必要とされる運動です。自閉症の児童の多くは、リズム感がよいので、適切な指導をすると比較的短期間で跳ぶことができるようになります。

始めに大なわ跳びに挑戦させましょう。なわを回して跳ぶという２つの動きを要求される短なわ跳びに比べ、大なわ跳びは跳ぶだけの簡単な運動です。これができると、縄跳びの楽しさが分かり、短なわの練習にもスムーズに入ることができます。

なわが体に当たって痛い思いを経験すると、なわ跳びの練習を怖がることがあり上達が遅れます。そのために、始めのうちはなわが当たっても痛くないように、長袖・長ズボンの服装で練習させます。それによって恐怖心が払拭されます。

ア 大なわ跳び

大なわ跳びの練習で大事なことは、教師が児童の動きに合わせてなわを回すことです。どんな状態でも「跳べた！」という成功体験が味わえるような、なわの回し方をすることが上達のポイントです。前向きに跳んでどんどん前に進んでいってしまう児童がいたら、一緒になわを回しながら前に進みましょう。児童の跳び方に付き合っていくと、練習を重ねるごとに前進する距離が縮まり、最終的にはその場で跳ぶことができるようになります。

子供の動きに合わせる

回っているなわに入れない時は、「１・２のハイ」のリズムを教え、「ハイ」で、教師が背中を軽く押して、回っているなわに入れてあげます。その後は、その児童の跳ぶリズムに合わせ、なわをうまく回してあげます。自分の口からも「１・２のハイ」を言わせ、必ず教師がそばに寄り添い背中を押してあげていると、次第に教師がつかなくても自分で「１・２のハイ」と言って入れるようになります。

回っているなわから抜け出せない時は、なわを回している教師が動いて、児童をなわから出すようにします。始めは児童を動かすのではなく、あくまでも教師が動くようにしていきます。これも数をこなすとタイミングがつかめ、自分で回っているなわから抜け出すことができるようになります。

イ　短なわ跳び

短なわの練習ではすぐになわを使うのではなく、手拍子でリズム打ち、その場でリズムよくジャンプをするなどの指導をしっかりしてからなわを持たせます。

次に、ジャンプをせずになわを回す練習をします。なわを半分に切りその先に重りをつけて、片手ずつに持たせて回す練習をします。右（左）→左（右）→両手の順で練習をしていきます。最後に、半分に切ったなわを両手に持って、跳ぶ練習をします。

この練習が終わったら一本の短なわを使います。うまく跳べるまでにはかなりの練習が必要です。一般に、冬が近づくと全校的になわ跳び運動が始まりますが、なわ跳びができない児童はそれに間に合うように、早いうちから練習に取り掛かりましょう。

（8）　短距離走

自閉症の児童の多くは、長距離走ですばらしい活躍を見せます。一方、短距離走となると全速力で走ることが苦手です。

競争意識が低いこと、長距離走と短距離走の区別や意味が理解できないことが原因と思われます。

「もっと速く！」「本気で走る！」と言葉をかけても、その言葉が理解できないので、短い距離から、全速力で走る練習を繰り返すとよいでしょう。

だらりと両腕を伸ばして走るなどの、正しいフォームが定着しない時は、手に卓球玉のようなものや補助棒を持たせると、指先に意識がいき腕が少し曲がってきます。（ランニングの時にも使うと効果があります。）

走るコースがはっきり分かるように視覚的な工夫も必要です。練習法としては教師がお手本を見せるだけではなく、手を握って一緒に速く走ったり、後ろから鬼ごっこのような形で追いかけたりして、「ランニング」と「かけっこ」の違いを教えます。言葉で説明するより実際に体験させることが必要です。

いくら練習しても成果の現れない児童が出てきます。その場合は、目標を「最後まで自分のコースを走りぬく」などと、速さを目的とするのではなく他のものに変えましょう。

⑼　運動量の確保

体育の時間は、たくさん体を動かしてたくさん汗をかくことが大事です。教師の説明が長かったり、指導形態の曖昧さから待ち時間が長かったりして、活動の時間を減らすことのないように、事前の準備や教師間の打ち合わせを忘れずにしておきましょう。

５　音楽

自閉症の児童の中には、リズム感がよかったり絶対音感がよかったり、音楽に興味・関心を持ったりする児童が少なくありません。余暇活動の一つとして、歌を歌ったり楽器を演奏したりして、充実した生活が送れることを目指し、指導をしていきます。

⑴　歌の指導

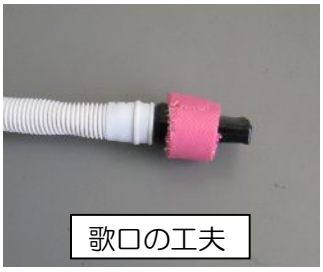
ア　自閉症の児童は、一人で歌うのは得意ですが、みんなと一緒に歌うのを好まない場合があります。その時は、無理に歌を歌わせることのないようにしましょう。みんなと一緒に自然に歌えたら、褒めましょう。

イ　個人用の歌詞を用意し、目の前で、歌っているところの歌詞を教師が指で指し示すと、歌えることがあります。

ウ　聴覚をうまく活用し、曲をＣＤ等に録音して常時流していると、自然にメロディーや歌詞を覚えることができます。新しい曲を次々にたくさん教えるより、一つの曲を繰り返し指導すると覚えやすいということです。

⑵　鍵盤ハーモニカの指導

ア　鍵盤ハーモニカを弾く前に

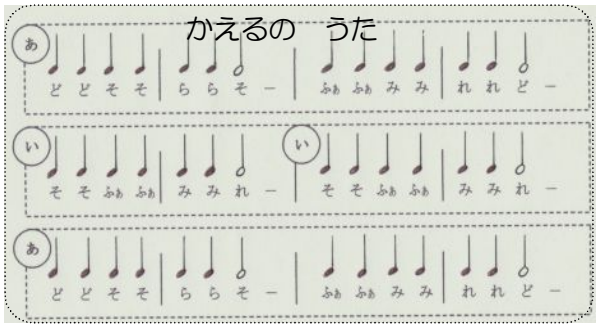


(ｱ) 歌口を使って息が吹けるか確認しましょう。できない時は、ストローを水に入れて泡が出るまで指導し、次に、歌口を水に入れて同様に泡がでるまで吹かせましょう。

(ｲ) 歌口を所定の位置まで口に含むことができるか確認し、深く含む場合は歌口をガムテープ等で厚く巻き、それ以上含まないようにさせる工夫が必要となります。

(ｳ) 歌口をはずし、キーボードのみで指の練習をします。ドレミファソまでを５本指で親指、人差し指・・・と順に練習し、それができたら音を出させてみましょう。

イ　曲の練習



(ｱ) 教師が、課題曲を階名唱で歌って聴かせたり、ＣＤ等に録音したものを流したりしながら曲に親しませましょう。

(ｲ) 階名が分かりやすいプリントを作りましょう。同じ曲が使われていることに気付くことがあります。階名がすらすら読めるようになるまで読みます。

(ｳ) 階名唱の練習をしましょう。正しい音を覚えさせるために、教師はキーボードなどで音を出し、一緒に歌うようにします。

(ｴ) 何度も歌っていると暗譜ができます。暗譜させることが大切です。

(ｵ) 鍵盤ハーモニカには、階名シールを貼りましょう。文字の読めない児童には果物シール等がよいですが、一般的にはどれみと書いたシールの方が分かりやすいでしょう。

(ｶ) 鍵盤のどこを弾くのか、はじめは教師が児童の指を持って一緒に弾くとよいでしょう。この時は人差し指一本で弾かせるとよいでしょう。

(ｷ) 次に、教師は児童の指は持たず、正面から鍵盤を指で指示します。慣れてきたら、５本

指で弾く練習に取り組ませます。（無理なら一本指でもよいことにしましょう。）

(ｸ) 一人で演奏できるようになったら、左手で鍵盤ハーモニカを持ち、立って演奏させます。

(ｹ) 曲に合ったテンポにさせるようにします。そして、最後にみんなの前で発表させるようにしましょう。終わったら、必ずみんなで褒めましょう。

※　鍵盤ハーモニカの上達のポイントは、階名唱を空で歌えることです。

(3)　リコーダーの指導

右手が上になる

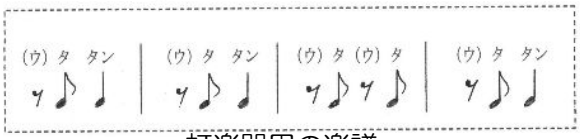
ア　リコーダーへの興味・関心を持たせるためにも、教師は、児童の好きな曲をリコーダーで演奏しましょう。

イ　リコーダーを持つ時の正しい姿勢や、正しい吹き方を指導します。力んでピーピー吹かないように、出してはいけない音を言葉で説明するより、実際に聞かせると効果的です。

ウ　曲の練習は、鍵盤ハーモニカの指導を参考にしてください。指の使い方を教えるためには、教師の左右の手の使い方を逆にすると、鏡のようになり、児童はそれを見ながら練習ができます。

※　リコーダーの上達のポイントも、音符が読めない場合は、空で階名唱が歌えるようになることです。

(4)　打楽器



打楽器用の楽譜

前述しましたが、自閉症の児童の多くはリズム感がとてもよいという特性があるので、打楽器の指導を取り入れるとよいでしょう。

ア　初めに教師が曲（リズム）をしっかり覚えます。ＣＤ等に録音し、それを頻繁に流すようにします。

イ　打楽器のパートだけを書いた楽譜を作りましょう。そこには、ぜひ、覚えやすい言い回しを入れます。（タン　タン　タタ　タン・・・）

ウ　言い回しを覚えたからと言ってすぐに打楽器を持たせず、初めは手拍子で練習させます。

エ　手拍子できちんと拍子が取れるようになったら、打楽器での練習に入ります。

オ　みんなと合わせ合奏します。最後に上手に演奏できたことを褒めましょう。

(5)　その他

ア　自閉症の児童が、楽しく歌を歌ったり楽器を演奏したりできるようになるために、文字を読む力を付けてあげるとより効果的です。

イ　聴覚過敏のある児童の中には、音楽の授業が辛い児童もいます。場合によってはヘッドホーン・耳栓の使用を認めましょう。あるいは、場所を変えての練習なども効果的です。

ウ　練習に当たっては練習の回数をはっきり決め、あと何回練習するか視覚的に分かるようにすると、自閉症の児童は最後までしっかり練習に取り組むことができます。

エ　練習が終わったら、たくさん褒めましょう。

オ　特別支援学級の中だけの音楽の授業では、正しい音・美しい音を聴いたり演奏したりする機会がどうしても少なくなります。音楽交流に参加することで、通常の学級の児童とのふれあいを大事にしながら、正しい音・きれいな音を学ばせる環境を作りましょう。

第７章　自閉症の障害特性に応じた校外学習等

特別支援学級では、実際に体験することを通して学ぶ機会を積極的に取り入れています。体験学習の一つとして、校外学習や宿泊学習も行われます。自閉症の児童にとっても、体験を通して学ぶことはとても重要ですが、通常の学習環境と違う校外学習や宿泊学習では、その特性に応じた配慮が必要です。適切な支援をすることで、自閉症の児童も校外学習を楽しみ、様々なことを学ぶ機会とすることができます。

１　教師の準備

⑴　実地踏査

自閉症の児童が校外学習に参加するにあたり、教師が実地踏査を十分に行うことが重要です。実地踏査では、自閉症の児童が実際に参加する場合を考えて、安全面や衛生面、自閉症の児童が苦手とする感覚刺激等について確認しましょう。特に、音や光、におい等の感覚刺激については配慮が必要です。

⑵　実施計画をたてる

実地踏査に基づき、実施計画をたてます。見学先や体験活動が児童の実態に合っているかを十分に検討しましょう。見学や体験だけでなく、待ち時間の過ごし方や休憩場所の確保についても重要です。

⑶　保護者との連携

自閉症の児童は、教師が予想もしないようなことに苦手意識を持っていることがあります。また、苦手なものは、そのときによって違っていることもあります。あらかじめ、保護者から十分に情報を聞きとっておくことが大切です。

自閉症の児童の中には、独特の生活習慣を持っている児童がいます。普段の食事・入浴・睡眠・排せつ等の方法や内容について聞くとともに、宿泊学習の中で対応の仕方を考えます。集団での宿泊学習で、どうしても対応が難しい場合には、事前に家庭で練習してもらう必要があるものもあります。保護者との連携を十分にとって、当日に臨むことが重要です。

⑷　通常の学級との連携

校外学習や宿泊学習の中には、通常の学級と一緒に行うものもあります。その際には、計画の段階から通常の学級との連携を密にしていく必要があります。

２　事前学習

⑴　見通しを持って、校外学習を楽しみにする

自閉症の児童にとって、いつもと違う活動は不安があるものですが、事前学習をしっか

りと行うことにより、見通しを持ち、校外学習を楽しみにすることができるようになります。

事前学習では、目的地、予定、一緒に行く人、行き方などの確認をします。また、公共交通機関の利用や、道路の歩き方、公共の場でのふるまい方などの約束を確認することも大切です。バスや電車の乗り方、切符の買い方などは、教室での疑似体験を通して練習しておくことも効果的です。

(7)　視覚的教材の活用

自閉症の児童が、校外学習についてのイメージを持ち、見通しを持って取り組むことができるよう、事前学習では視覚的な教材を活用しましょう。実地踏査や前年度に撮影した写真やビデオは、その一つです。自閉症の児童が、より具体的なイメージを持ちやすくなります。ＩＣＴ機器を効果的に利用することで、児童の意欲が高まることが期待できます。

《写真を利用した教材の例》　写真は印刷したり、プロジェクターで大きく映したりします。

９：１５

ごうとくじえき

ほんあつぎいきのでんしゃにのります。

３　当日の参加

丁寧に事前学習を行うことで、見通しを持って当日の活動に参加できるようになりますが、必要な場合には、個別に簡単な行程表を作成します。絵や写真、文字など、視覚的な情報を整理して伝えられるものを工夫しましょう。宿泊学習では、宿舎の部屋に予定表を貼っておくと、児童がいつでも予定を確認できます。天候等、そのときの状況で予定を変更する場合には、丁寧に説明するようにしましょう。言葉での説明だけでなく、文字にして伝えることで納得できる場合もあります。

第８章　自閉症の障害特性に応じた特別活動

自閉症の児童の中には、学校行事への参加や、その前後で不安定になる児童がいます。しかし、自閉症の障害特性に応じた適切な配慮をすることで、自閉症の児童も行事を楽しみ、行事を通して大きく成長することが期待できます。

通常の学級とともに行うことの多い学校行事では、自閉症の障害特性や、それに応じた支援について、学校全体で理解し、自閉症の児童を見守っていく体制を作っていくことも重要です。

１　体育的行事（運動会）

⑴　自閉症の児童にとって困難が予想される点

運動会の前には、本番に向けて練習の期間があります。学校生活が通常の流れと変わることで、見通しが持ちにくくなります。練習は通常の学級と共に進められることが多く、大きな集団の中にいる時間が長くなります。練習中には、直接自閉症の児童へ向けられたものでなくても、ときには、教師の厳しい指導の声が聞こえることもあるでしょう。

本番は、長時間、校庭にいることになります。校庭では、暑さや土の汚れが気になります。また、音楽や、信号器の大きな音、観客の声援等が常に聞こえる状況です。感覚過敏の児童にとっては、困難が予想されます。

⑵　当日までの配慮事項

多くの学校では、運動会３週間ほど前から特別時間割となり、普段と違う流れで学校生活がすすみます。自閉症の児童には、より丁寧な予定の確認が必要となります。その際、児童の実態に応じて、伝える量（１日分、１週間分等）、伝える方法（写真、絵、文字等）を工夫することが重要です。

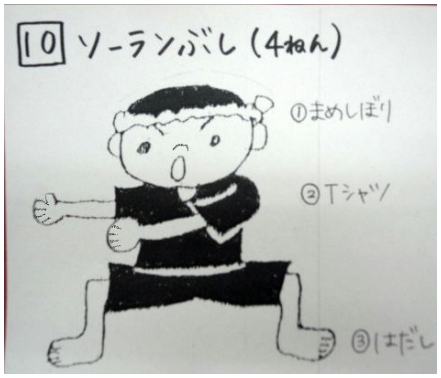
運動会は、通常の学級とともに活動することが多いです。初めてのことに取り組むことが苦手な児童には、初めのうちは見学とし、どのようなことをするのかが分かってから練習に参加するようにしてもよいでしょう。また、練習の初期段階では、細かな動きを繰り返し確認することが多かったり、変更することがあったりします。このため、自閉症の児童にとっては、見通しを持ちにくく練習に参加することが難しいこともあります。通常の学級担任との連携を深め、全体の流れがある程度決まった頃から練習に参加するなどの配慮ができるとよいでしょう。学年での練習だけでなく、学級で練習することで、自閉症の児童が自信を持って取り組めるようになります。また、教師の踊りを録画し、家庭で映像を流してもらうことも効果的です。

小学校の高学年や中学校では、係活動に参加することがあります。その際には、児童の実態に応じて内容を精選し、最後までやり遂げられるように配慮しましょう。

⑶　当日の参加

当日は、自閉症の児童が見通しを持って、落ち着いて取り組めるよう、今していること、

これからすることが分かるように伝えることが大切です。その際、プログラムなどの視覚的な手掛かりは有効です。児童の実態に応じて、絵や写真を使った分かりやすいプログラムを用意することが必要なこともあります。また、教師がタイミングよくプログラムを確認したり、児童が自ら確認できるように促したりして、プログラムを効果的に使用できるようにしましょう。



〈プログラムの例①〉
・１つずつカードで提示
・やることを絵で示しています

9　５０メートルそう（１ねん） おうえん
１０　ソーランぶし（４ねん） ・まめしぼり ・Ｔシャツ ・はだし がんばろう！

〈プログラムの例②〉
・表にして全体を提示
・「おうえん」「がんばろう」など、見るところ、参加するところを示しています。

これらの工夫をしても、長時間の行事に参加し続けることが難しい場合もあります。そのようなときのために、一時休憩ができる場所を用意しておくことも必要です。あらかじめ「プログラム○番から□番は、教室で休憩します。」と決めておくことで、安心して取り組める児童もいるでしょう。

大きな集団での種目に参加するときには、自閉症の児童の位置に配慮しましょう。例えば、表現種目（ダンス等）では、前にいる友達の動きを見て、安心してできるよう、最前列や最後列の位置は避けるとよいでしょう。また、周回コースの短距離走では、前の友達を見てスタートすることができるインコースが分かりやすいです。

(4)　感覚への配慮

感覚過敏のある自閉症の児童には、運動会のスタートの信号器や常に流れている音楽など、特に「音」への配慮が必要です。耳栓やノイズキャンセラー等を使用したり、スタートの信号器を小さい音のものや笛の合図に変更したりすることができるとよいでしょう。また、大きな音がでる前に、「大きな音がするよ」と知らせることで、大きく不安定になることなく乗り切れる場合もあります。

また、「汚れ」がとても気になる児童には、着替えを用意しておきます。汚れが気になったら着替えができることを知らせておくと、安心して取り組める場合もあります。

2　文化的行事（学習発表会・学芸会）

(1)　自閉症の児童にとって困難が予想される点

学習発表会等は、大きく「ステージ発表」と「鑑賞」の場面が考えられます。どちらも、

日常的にはあまり経験することのないことで、自閉症の児童にとっては、強い緊張を感じる場面となることがあります。また、音や照明などの刺激に、過敏に反応してしまうことも考えられます。

⑵　ステージ発表

学習発表会等では、学級としてステージ発表をすることがあります。大勢の前で発表することが苦手な自閉症の児童もいます。事前の練習を丁寧に行い、自信を持って取り組めるようにしましょう。

大道具や衣装、照明、音響等、自閉症の児童にとって刺激になりやすいものについては、早めにそろえて、できるだけ本番に近い形で練習ができるとよいでしょう。感覚過敏から、他の児童と同じ衣装を付けられない児童もいます。特に、頭にかぶるものは苦手な児童が比較的多いようです。本人の許容範囲を見極めて、衣装を工夫したり、別のものに取り換えたりする必要があります。また、暗すぎたり、まぶしすぎたりするのが苦手な児童には、照明を工夫することも必要です。

⑶　鑑賞

学習発表会では、発表を鑑賞する時間があります。見通しを持って参加することができるよう、事前の説明を丁寧に行うとともに、プログラム等の視覚的な手掛かりを利用して、今何をしているのか、次は何があるのか、といったことを確認しながら鑑賞できるようにするとよいでしょう。

鑑賞中、会場が暗くなることが多いです。暗い場所にいることが苦手な児童には、本人の手元や足元だけを懐中電灯で照らすなどの配慮をしましょう。また、演目間には会場が明るくなることを伝えることで、児童が安心できる場合もあります。

また、「音」への配慮も必要です。それぞれの児童の実態によって、大きな音だけでなく、低い音、高い音等、苦手な音も様々です。苦手な音がでるところをあらかじめ本人に伝えておくことや、場合によっては、一時的に席をはずすなどの配慮をしましょう。

これらの工夫をしても、長時間、鑑賞を続けられないことがあります。そのようなときのために、一時休憩ができる場所を用意しておくことも必要です。その年は最後まで参加できなくても、翌年には参加できる時間が長くなる、ということもあります。長い目で児童の成長を見守っていきましょう。

3　儀式的行事（入学式、卒業式）

⑴　自閉症の児童にとって困難が予想される点

儀式的行事は、多くの学校行事の中でも特に緊張を強いられるものです。自閉症の児童にとっても同様で、普段と違う雰囲気の中で長時間着席していることには、困難が予想されます。特に、新入生にとっての入学式は、事前に練習することができないため、初めてのことが苦手な自閉症の児童にとっては、特に配慮が必要になります。

⑵　入学式

新しい場面の苦手な自閉症の児童ですが、初めての学校での行事を良いイメージで終え、その後の学校生活にスムーズに結び付けていきたいです。自閉症の児童の中には、嫌なイ

メージと場所が結び付き、後まで残ってしまうこともあります。特に小学校の入学式は、児童にとって初めての経験となることが多いため、配慮が必要です。

まずは、事前に児童の実態把握をすることが重要です。保護者からの聞き取りや、就学支援シートを活用しましょう。また、春休み中に、本人が下見をできるとよいでしょう。本人が会場を知ることができるとともに、教師が児童の行動を観察し、当日の支援に生かすことができます。下見によって学校は楽しいところだという印象が持てると効果的です。

入学式中は、本人の様子を丁寧に観察し、決して無理をさせないように支援しましょう。支援にあたる大人が、プログラムや時計などの視覚的な手掛かりを用いて見通しを持たせるような工夫が効果的です。また、式に参加することが難しい場合には、式場の入り口での見学や、教室での待機も一つの方策です。もしそのようになった場合の対応について、事前に保護者に確認しておくことも大切です。

特に、小学校の入学式では、自閉症の児童だけでなく、他の児童にとっても長時間の式に集中して参加するのは難しいことです。式次第をできるだけ簡潔にするとともに、校長の式辞等の挨拶は視覚的な手掛かりを工夫する等の支援で、どの児童も落ち着いて参加できることにつながります。

⑶　卒業式

一般的に卒業式は、入学式に比べて長時間の緊張を求められます。自閉症の児童にとっては、見通しを持って取り組めることが大切です。

式の流れを理解できるよう、丁寧に練習をするとともに、実態に応じたスケジュール表等の、視覚的な支援も効果的です。式中は、自閉症の児童が自分でスケジュールを確認できるとよいですが、補助の大人が近くにいて、今何をしているのか、終わりまで何があるのか等を指し示すことで安心して取り組めるようになる場合もあります。

卒業証書を受け取るときには、順路や止まる位置等が分かるよう、床に簡単な印を付けるなどの手掛かりがあるとよいでしょう。初めに分かりやすく説明し、丁寧に練習をすることで、児童が自信を持って取り組めます。式場の装飾は、生花が使われることが多く、直前まで完成しないことが多いですが、事前に本番と同じ会場を下見できるとよいでしょう。

在校生として参加する場合にも、見通しを持って参加することができるような支援が必要です。在校生として卒業式を経験することで、自分が卒業するときのイメージを持たせられるとよいでしょう。

卒業式では、起立する場面が多くあります。司会の指示を聞いて動くことが難しい場合は、周囲の児童を見て動くことができるよう、座席の配慮をするとよいでしょう。

証書授与の際の手掛かりとなる印。止まる順番と、体の向きを示しています。

第９章　自閉症の特性に配慮した交流及び共同学習

１　自閉症の児童にとっての交流及び共同学習のねらい

自閉症の児童においても、交流及び共同学習を通して次のような力を高め、心豊かな学校生活を送ることが期待されています。

⑴　友達や教師との幅広い人間関係を築き、連帯感を育みます。

⑵　学級で学んだ対人関係スキルやコミュニケーションスキルの般化の機会として位置付け、一層の定着を図ります。

⑶　様々な関わり合いから成就感を得て、意欲や自信を高めます。

⑷　様々な経験の拡充を図り、集団や社会への適応力を高めます。

２　一貫性・継続性のある交流及び共同学習

⑴　通常の学級と特別支援学級の教育課程上に交流及び共同学習を明確に位置付け、教育課程の充実を図ることが大切です。

⑵　各教科等の年間指導計画や個別指導計画に交流及び共同学習を位置付け、計画的に実施していきます。

⑶　個別の教育支援計画の中に交流及び共同学習を位置付け、事前にねらいを明確にします。さらに個別の教育支援計画に基づき、個別指導計画を作成し、計画的に実施します。また、各教科・領域等の年間指導計画に内容及びねらいを位置付け、計画的に実施します。

⑷　校内委員会においては、アセスメントやねらい、具体的な支援について検討し、交流及び共同学習が計画的、継続的に展開されるように推進していきます。

３　充実した交流及び共同学習にするためのポイント

⑴　児童の具体的な姿を中心に置いた打ち合わせ

交流のねらいや単元計画、環境設定、安全面への配慮、通常の学級の児童への説明や理解･啓発、一人一人の児童への具体的な支援や配慮事項等について打ち合わせを行います。校内への情報提供、担任の役割分担、交流会場の確保と整備、事後の継続的な交流、保護者への理解啓発等についても相談しておくようにします。

⑵　計画的な事前学習と家庭との連携

児童が見通しを持ち、主体的に参加できるように、単元の中心的な場面や行事学習当日の交流活動を達成させるために必要な課題を段階的に取り入れた交流計画を、スモールステップで作成していきます。

また、児童にとって初めての場面や緊張する場面を体験したりする場合は、不安な様子が見られる場合も考えられます。交流活動の予定を視覚的に示したり、個別の交流計画を

立てたり、保護者にも事前に説明して了解を得たり、協力を依頼したりしておくことが大切です。

【指導事例】　交流及び共同学習「移動教室」の事前学習

<table>
<tr><th>活動場面</th><th>活動場面に必要な態度、スキルなど</th><th colspan="2">事前学習の教科等/指導、支援の内容</th></tr>
<tr><td>バスの安全な利用や車内での過ごし方について</td><td>① 落ち着いて、穏やかな気持ちで過ごそうとする態度。

② バスの中や乗り降りの際に安全に気を付けて過ごそうとする態度。

③ 通常の学級の担任や友達、バスガイドさんの話を静かに聞こうとする態度。

④ 大きな声で挨拶をしたり、聞かれたことに答えたりするスキル。

⑤ 自分の座席を理解して、自分で座るためのスキル。

 </td><td>総合的な学習(生活単元学習)</td><td>○バスの中の予定を視覚的に示し、見通しを持って落ち着いて過ごせるように支援します。

<u>バスの中の予定</u>
① あいさつをする
② やくそくを聞く
③ じこしょうかいをする
④ 歌をうたう
⑤ ゲームをする
⑥ ガイドさんの話を聞く

○「バスのやくそく」としてルールを示し、気持ちよく過ごせるように支援します。

バスのやくそく
・運転席のものはさわらない。
・バスから手や頭を出さない。
・シートベルトをしめて座る。
・バスからおりた時は、先生といっしょに行動する。車や自転車に気をつける。
・ゴミはゴミぶくろに入れる。
・じぶんの席にすわる。
・大きな声で挨拶をする。
・先生や友達、バスガイドさんの話をしずかに聞く。
・友達の名前をおぼえる。やさしいことばで話す。

○実際に椅子を並べて着席し、シートベルトの締め方や挨拶、応答等を練習しておきます。</td></tr>
</table>

バスの中の自己紹介	⑥　自己紹介カードを活用し、自分の名前や移動教室に向けた思いや願いなどを伝えるスキル。 	国語	○自己紹介カードを作成する。自分で管理したり、携帯したりすることができるサイズで作成しておく。実際にマイクを使って練習しておく。マイクの使い方の約束を示す。 自己紹介カード わたしの名前は、○○○○です。 ハイキングでは、さいごまで歩きたいです。 よろしくおねがいします。
歌の時間	⑦　歌詞カードを活用し、友達と一緒に歌うスキル。 ⑧　一人で歌うためのスキル。 	音楽	○児童の読みの能力に応じて、平仮名か漢字で歌詞カードを作成します。 ○音楽の時間や朝の会などに実際に歌って耳に慣れるようにしておきます。聴覚過敏の児童には、音量に配慮したり、耳栓を用意したりします。 ○自分の好きな歌を一人で歌えるように練習しておきます。
ゲームの時間	⑨　ゲームのルールを理解し、友達と一緒にゲームに参加するためのスキル。	総合的な学習(生活単元学習)又は国語や算数など	○事前に通常の学級のレクリエーション係の児童や担任からゲームの内容を聞いておき、しりとりやなぞなぞ、クイズ、ビンゴなどの練習をしておきます。 ○ゲームのルールは視覚的に理解できるようにカードなどに書いておきます。 ○移動教室の目的地やバスの車窓から見える景勝地などについて知識を伝えておきます。

(3)　交流の場面を想定した日常生活の指導やコミュニケーションの指導

ソーシャルスキルやコミュニケーションの指導については、自立活動の個別指導計画を作成し、全ての教育活動において日常的に、様々な場面で指導・支援を行うようにします。特に、日常生活の指導においては、交流の具体的な場面を想定した挨拶や場面に応じた会話、係活動や当番活動の役割を最後までやりぬく態度等を指導しておきます。コミュニケーションの指導においては、場面に応じた行動の仕方や具体的な関わり方等を事前に指導しておくようにします。

⑷　困った時に支援の依頼ができるようなスキルや態度の育成

日頃から不安になった時、分からない時、不快を感じた時などに、自分から教師に支援を求めるためのスキルや態度を指導しておくことがとても大切です。交流活動は、初めてのことや変化を伴う活動、集団全体で長時間一緒に行動する活動も多く、見通しを持つことが苦手だったり、周囲に合わせて集中力を持続することが苦手だったりする傾向がみられる自閉症の児童にとっては、辛い思いをすることも考えらます。

もちろん、事前に児童の実態に応じて教師が配慮しておくことが重要ですが、自分から「先生!」と教師を呼んだり、SOS カードなどのツールを活用したり、「分かりません。」「教えてください。」「手伝ってください。」「問題数を減らしてください。」等という話形を活用したりして、支援を求めていくことも指導しておきたいです。

⑸　得意な面を活かした交流及び共同学習

自閉症の児童には、特定の分野における豊かな知識、感性豊かな図画工作の作品制作、清掃活動等の作業学習への真面目な取り組み態度等優れた面を持つ児童も多いのです。相互によさを認め合うことができる交流場面を設定することは、自閉症の児童の得意な面や長所等のよさを理解してもらうためのよい機会となります。掲示コーナーや作品紹介コーナーを常設したり、作品発表会を開催したり、清掃活動を通した交流を進めたりして、日常的で多様な交流及び共同学習の在り方も工夫していきたいところです。

４　通常の学級の担任と特別支援学級の担任の役割

	通常の学級の担任、専科担任	特別支援学級の担任
情報交換	○特別支援学級全体の様子を把握する。自閉症の児童の障害特性について理解する。	○通常の学級の全体の様子を把握する。 ○特別な教育ニーズのある児童について実態を把握する。
ねらいの設定	○発達段階や学級の児童の様子に応じて交流のねらいを設定する。 ・低学年…誰とでもなかよくする。誰にでも苦手なことがある。 ・中学年…誰とでもなかよくする。誰にでも苦手なことがあるが、協力、助け合い、支援したりして生活する。 ・高学年…誰とでも気持ちよく生活する。障害についての理解を深める。自分の生活や生き方を見つめ直す。自分にできることは何か考える。	○校内の人間関係を構築したり、社会性を高めたりする。 ・大きな集団のルールや決まりについて理解し、守ろうとする態度を育む。 ・周囲の友達の様子を見て、基本的な行動様式を学ぶ。 ・通常の学級の担任や友達と好ましい人間関係を築く。 ・校内の友達と一緒に活動することを通して、連帯感を育む。 ・交流活動への参加意識を高め、課題を達成して意欲を高める。 ・指導体制やグループ編成、具体的な支援方法等について事前によく相談しておく。
交流計画	○児童自身が自閉症の児童のよさや障害特性に気付き、今まで以上に理解を深めることができるように計画する。	○できるだけ日常の時間割に影響が出ないように配慮する。事前に視覚的に分かりやすく説明し、見通しを持たせる。
事前学習の実施	○道徳や人権教育、生活指導等を中心にして、命の大切さ、一人の人間としての同じと違い、得意と苦手、障害特性等について説明し、児童の自閉症に対する理解を深める。 ○自閉症の児童との具体的な関わり方やコミュニケーションのとり方について事前に指導しておく。	○単元計画の最終目標を伝えておき、目的意識を持つて交流に参加できるようにする。 ○特別支援学級の担任が、交流先の学級に出前授業を行う場合は、自閉症の児童の得意な面や苦手な面について説明したり、障害についての理解を促したりする。
環境整備	○刺激になる掲示物や教材などは取り外しておく。 ○危ない教具等は、安全な場所にしまっておく。 ○グループ活動やペア活動を行う場合には、人間関係や指導体制との関係で事前に十分検討しておく。	○交流の会場場所を実際に下見しておき、児童にとって刺激になるものや安全上心配なものをチェックし、環境整備に努める。 ○分かりやすい環境作りのために、机や椅子の配置、動線の確保、教師や板書との距離や位置関係等について検討し、準備しておく。
交流における役割	○主たる授業者として全体進行を行う場合には、言葉の数を減らし、板書や視覚的な掲示物を活用して、自閉症の児童にも説明やプログラム等が理解できるようにする。 ○もう一人の教師と綿密な連携を図り、児童の状態に応じて柔軟に対応し、満足感や達成感が得られるように配慮する。	○T2 として児童の補助を行う場合は、一人一人の障害特性に応じた支援を行う。事前に環境や時間、活動内容を分かりやすく視覚的に提示したり、教材の個別化を図ったりしておく。 ○通常の学級の特別な教育ニーズのある児童にも支援を行う場合は、事前に一人一人の実態について十分に理解しておくことが大切である。
その他	○日頃から、一人一人のよさや違いを認め合う学級経営を推進したり、日常的に道徳や人権教育の問題を取り上げて指導したりしておくようにする。	○日頃から通常の学級の児童や担任とコミュニケーションを取ったり様々な触れ合いの場面を積極的に計画したりして、人間関係の構築に努めるようにする。

第 10 章　自閉症の障害特性に配慮した保護者支援

1　保護者と共に育てる

自閉症の児童は、その障害特性から、学校教育の中だけでなく、家庭生活や社会生活においても困難が予想されます。保護者は、それらの困難に一つ一つ向き合い、自閉症の児童を愛情を持って育てているのです。当然、子育てを通して、その子について一番よく知っているのは保護者です。自閉症といっても、それぞれの児童によって得意なこと、苦手なことは様々で、その子のことについては、まずは保護者によく話を聞くことが大切です。

一方で、自閉症の障害特性から、児童の育てにくさを感じている保護者もいます。教師は、そういった保護者を理解し、支援していかなければなりません。そのためには、専門性を高めることが必要です。その児童について、一番よく知っている保護者に対して、教師は、多くの自閉症の児童のケースを知っていて、様々な支援方法の中からその児童にあった支援を考え、提案できる存在です。

保護者の声にしっかりと耳を傾け、学校での児童の様子を丁寧に伝えることを通して、保護者と協同して、学校生活だけでなく、家庭生活、社会生活も含めて自閉症の児童を支援していけるようにしましょう。

2　保護者と共有したい情報

⑴　児童の実態

児童の得意なことや苦手なこと、好きなこと、嫌いなことを確認しましょう。家庭ではできていることが学校ではできない場合や、その逆の場合もあります。そのような場合は、その要因を保護者と考えましょう。

⑵　児童の課題

家庭や学校における児童の現在の課題を確認しましょう。自閉症の児童は、こだわりがあったり、コミュニケーションが苦手であったりするため、周囲の人にとって問題と思われる行動をとることがあります。他の児童とのトラブルや、学校生活をスムーズに送る上で課題となるような行動については、保護者にも伝えていく必要があります。その際、行動の原因やきっかけとして考えられることや、支援の手だてについても併せて伝えていくようにします。

⑶　支援の手だて

自閉症の児童の中には、周囲からの働き方が場所や人によって異なると混乱し、普段できることもできなくなってしまう場合があります。学校と家庭で、支援の方向性や手だてをできるだけ同じにしておくことが必要です。児童の発達段階に応じて、支援の手だても変わっていきます。いつからどのように変えていくのか、保護者と共通理解しておくことが大切です。

３　保護者と情報を共有するための手段

自閉症の児童は、学校でのことを家庭で保護者に正しく伝えるのが難しいことが多いです。保護者にとっては、学校での様子がわからないのは、とても不安なことです。初めは小さな不安でも、いくつか重なると大きな不信感につながることもあります。連絡帳や、面談、電話等を通して、学校の様子を丁寧に伝えましょう。

保護者にその日の学校での様子を伝えたり、家庭での様子や困っていることを伝えてもらったりするのに、連絡帳は有効な手段の一つです。児童がいる時間帯に連絡帳を書くことはたいへんかもしれません。イベントがあったときにはデジタルカメラで撮影した写真を翌日貼り付けるなどの工夫をするとよいでしょう。また、保護者の中にも、毎日連絡帳を書くことを負担に感じる方もいます。書式を工夫して、学校にも保護者にも負担になりすぎないようにしましょう。

第 11 章　中学校への進学に向けて

1　自立について

児童の将来を考えたときに、社会の中で「自立」することが最終目標になると思います。私たちは何事も一人でできることが「自立」であると考えがちです。身辺自立など一人でできた方が良いこともあります。しかし、一人の力だけで社会生活を送れる人などいないのが現実です。児童に対して「自立」に向けた指導するときに、一人でできることと、他者と協力してできることの二つの視点から「自立」を捉え指導していくことが、児童が社会に出たときにより充実した生活を送れることにつながっていくと思います。また、保護者に対しても、児童に興味・関心を持ってもらいながらも、一歩引いて見守る姿勢が大切になってくることを伝えていく必要があります。

2　中学校時代に直面する課題について

思春期の入り口にさしかかるこの時期は身体が大きく成長すると同時に、異性も含めて人に対する興味・関心が高まる時期でもあります。感情を表現する方法として抱きついたり、遊びのつもりで他者を押したりして人と関わりを持とうとする生徒を見かけます。急激に身体が成長し大きくなることで、今までは問題にされなかった行動が、トラブルの原因になることが多々あります。また、自閉症の生徒が抱えるコミュニケーションスキルの乏しさも周囲から誤解を受けてしまうきっかけになることもあります。行動を柔軟に変更することが苦手な自閉症の生徒にとって、理由がなんであれ急に行動を変えることは難しいことです。ですから、小学校のうちから、一人一人の特性にあった一般的なコミュニケーションスキルの獲得を目標にすることが大切です。

3　コミュニケーションについて

「指示されたことに対して、自分の意にそぐわなくても従ってしまう」傾向がある自閉症の生徒にとって、「ことわる（NO）」が使えるようになることが大事です。自己主張が強く、はっきりと表出してくる中学校時代に、周囲からの要求を受け入れるだけになりがちな、自閉症の生徒のストレスは想像以上のものがあると思われます。「NO」の使い方を指導するときは、使用する上でのルールを決めて、また、他者との意図的な関わりの中で、単なるわがままを通す方法とならないよう、注意し学習を進めていくことが必要です。また、「NO」の使い方を覚えると同時に、相手の要求と、自分の要求に折り合いをつけ行動できるようなることを目標として行くことが必要になります。

4　余暇活動の充実

児童が成長するにつれ、家族以外の人と過ごす時間や、家族や教師から指示を受けることなく一人で過す時間の必要性が出てきます。余暇活動とは自分の空いている時間をどのように過ごすかということで、一人で過ごす余暇と、他者と共に過ごす時間に分けて考えられます。普段は学校以外の場所での活動がほとんどなので、指導と結び付けることが難しいように思えますが、児童の好きなこと、楽しめることをたくさん作ることが余暇活動の充実につながってきます。具体的な取り組みとしては、習い事につなげるのであれば、体育の授業の中で得意なこと、好きなこ

とを見つけて、保護者に伝えおきます。本やＤＶＤ鑑賞が好きであれば、図書館やレンタルショップの利用の方法を学習させます。また、それに伴った交通機関の利用、公共のマナー、金銭の学習などにより、実践的な学習につなげることも可能となります。学習する際には、より具体的な場所での活動経験や実際に使われる道具などを用いることで、効果的に学習を進めることができます。

５　将来を見据える視点を持って

小学校時代は基礎を作っている時期で、将来に向けての土台作りをしているときとも捉えられます。児童の発達に添って個別指導計画が考えられていると思います。中学校でも、一人一人の発達段階に応じ計画されますが、目標が少し変わってくる部分があります。それは社会に出ていくことを見据えて、今まで学んできたことを社会の中でどう生かしていくか、活用していくための方法の獲得など、地域生活等に関連したより具体的なスキルの獲得を目標とすることが増えてきます。数学の数の計算の指導であれば、電車、バスに乗るために必要な金銭や、時間、時刻の計算であったり、国語であれば、指示書や、説明書を読んで活動したりと、学んだことを社会の中で生かす為にという視点を取り入れることが多くなります。別の言い方をすれば、今まで獲得してきたことに磨きをかけて、応用させていくことを意識して指導に当たるようになります。小学校高学年の頃から将来を見据えた教科指導を取り入れていくことも必要かもしれません。

最後に

本書は、平成 22 年度自閉症教育推進事業特別支援学級指導書作成委員会で検討し開発したものです。

自閉症のある児童と自閉症のない児童が在籍する学級での指導は、難しいことがあるかもしれません。しかし、自閉症の児童への対応は、その他の児童にとっても分かりやすい指導です。

今後も地域や学校ごとに、よい実践を提案しあって指導の充実を図っていってください。

○　平成 22 年度自閉症教育推進事業　特別支援学級指導書作成委員会

所　　属	職　名	氏　　名	備　　考
足立区立綾瀬小学校	校長	砥柄　敬三	委員長
北区立滝野川小学校	主任教諭	本谷あゆみ	
青梅市立若草小学校	主任教諭	野坂　純司	
立川市立第七小学校	主任教諭	菅原　眞弓	
日野市立第一小学校	主任教諭	戸田　和子	
世田谷区立世田谷小学校	主任教諭	塚田　倫子	
足立区立栗島中学校	主任教諭	八重樫　大	

※　東京都教育委員会では次の者が担当した。

指導部義務教育特別支援教育指導課長	伊東　哲
指導部特別支援学校教育担当課長	朝日　滋也
指導部主任指導主事（特別支援教育担当）	中西　郁
指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事	諏訪　肇
指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事	市川　裕二
指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事	島添　聡

小学校特別支援学級における
自閉症の児童の指導の工夫

東京都教育委員会印刷物登録
平成２２年度　　第１９７号

編集・発行　東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
所　在　地　東京都新宿区西新宿２－８－１
電　　話　０３－５３２０－６８４７

小学校特別支援学級における

自閉症の児童の指導の工夫

東京都教育委員会